



初めに負荷ありき

Life as it should be

人生を生きるには、二つの視点がある

一つは、すべて自らの意志に従って生きる“自由で独立した自己”を生きるみち (Life as I want to be)。もう一つは、人生を自分に与えられた物語として捉え、“負荷ありき自己”を生きるみち (Life as it should be)。

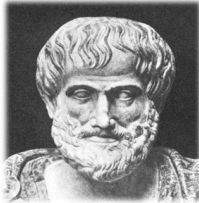
自由な人間とは：カントの考え

自由とは、自分が自分にあたえる法則に従って行動すること。自分の目標は自分で選ぶ。人間は、自分で選ばない限り、いかなる道徳的つながりにも縛られることはない。人間は、自らつくり出した義務によってのみ、自らを律する。私とは、自らこうありたいと選んだ存在である。



自由な人間：アリストテレスの考え

人間は、自己のもって生まれた能力を発揮する場がある限り、自由なのだ。人間は本質的に物語を紡ぐ動物である。「私は何をすべきか」という問いに答えるには、まず「私はどんな物語の中で自分の役割を果たそうとしているのか」という問いに答えねばならない。自己とは、たえず負荷をかけられている存在である。



最高のフルートは、誰の手に

人生が輝く時とは、どういう時であろうか。それは、本来の自分が発揮できたときである。では、なぜ本来の自分が発揮できたとき、人生が輝くのだろうか。この問いに、紀元前に生きたアリストテレスは次のように語る。この世で最高のフルートがあるとしよう。そのフルートは一体誰の手に渡すべきなのか。金持ちが手にすべきか。貴族か、最も欲しがっている人か、それとも平等主義者が言うかもしれないクジ引きを採用するのか。

アリストテレスの答はこうである。最高のフルートは、最高のフルート奏者に与えられるべきと。でもそれは何故か。彼らが最高の音楽を奏でるからか、それとも、皆が音楽をもっと楽しめるためからか、いや違う。アリストテレスの答は、「最高のフルートが、最高のフルート奏者に渡されることが、そのフルートの目的（テロス）だから」である。



男と女の美学

私たちがパートナーを選ぶときに働く意識は普通「私の考え、私の感情、私の経験」である。ではテロス（本来の目的）の視点からパートナーを選ぶとするなら、一体どうなるのであろうか。考え、感情、経験のみに支配されない高次元の目的、相手のテロス（大儀）を尊重し、自らのエゴをねじ伏せるだけの強さと正義がいるであろう。映画「カサブランカ」が今なお色あせないのは、今回のテーマ「初めに負荷ありき」の美学が、男と女の間を通りかかっているからである。

<事例 DVD等>

女優・石田ゆり子／結婚相手の条件／サワコの朝より
西郷家の嫁選び／大河ドラマ「せごどん」より
大久保正助：嫁選び／天下国家のため
アリストテレス vs. カント／ハーバード大自熱教室
サンデル教授／最高のフルートは誰の手に、
目的論的論法／クマのプーさんの事例より
カメレオンの求愛／オスの本能的行動
映画「卒業」ラストシーン
映画「カサブランカ」／なぜこの映画が人の心を打つのか
歌・中森明菜「恋」／♪ 今度生まれてくるとしたら、
やっぱり女で生まれてみたい♪ だけど二度とヘマはしない、
あなたになんか、つまづかないわ〜♪

円了のホームページ：www.enryo.jp

